

周作クラブ会報

(第47号)
2012年6月25日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

- 遠藤周作文学館 新企画展「**一生**」(1面)
- 遠藤文学・原島旅 報告(2・3面)
- 原稿発掘「二人の宮内作家として」(4面)
- 長崎文学館便り (5面)
- 文学セミナー 報告 (6面)

■遠藤周作文学館■

新展示「遠藤周作と長崎」

心の鍵が合う街

第7回企画展、長崎ではじまる

長崎市遠藤周作文学館(長崎市出津町77)では、2012年5月から、新たな企画展として「遠藤周作と長崎——心の鍵が合う街」が行われている。同文学館ではこれまでも2年ごとに展示内容を変えてきたが、今回で7回目となるこの企画展は去る5月19日(土)にはじまり、2014年5月まで行われる予定。『沈黙』『女の一生』など長崎を舞台にした作品に焦点をあて、遠藤文学が目指した地点を明らかにする。

長崎という土地について、遠藤周作は『沈黙の声』(プレジデント社)のなかでこう語っている。人には誰でも、自分の心の鍵がぴたりとその鍵穴に合うような街があつて、自分の場合はそ



遠藤周作と長崎

—心の鍵が合う街—

れが長崎だ、と。

『沈黙』を書く前の昭和39年に初めて訪れて以来、数えきれぬほどこの作家は長崎とその周辺をたずねているが、今回の展示「遠藤周作と長崎」では、長崎とその周辺を舞台としたすべての遠藤作品が取り上げられている。それらのうち、主たるものを年代順に記せば、「最後の殉教者」「その前日」「帰郷」「満潮の時刻」「雲仙」「留学」「憑かれた人」「沈黙」「ピエタの像」「母なるもの」「小さな町にて」「学生」「召使いたち」「ピエロの歌」「銃と十字架」

「還りなん」「ワルシヤワの日本人」「女の一生」(一部・二部)「奇蹟」となるが、特に昭和30年代半ばから50年代にかけては毎年のように長崎とその周辺を舞台にした作品が書かれたことが明らかにになる。

日本人とキリスト教という生涯のテーマを掲げた作家にとって、長崎はまさに「心の鍵がぴたりと合う街」だった。しかしそれを運命的と言つてもいいほどの出会いにしたのはやはり、長崎を訪れるようになったのが、結核の再発による長期の入院生活と、死をも覚悟した手術からの帰還という時期だったからだろう。そしてさらに、

もう、これからは書きたいものを書いてやろう。
と開き直つて長崎を訪れた遠藤周作のまえに、一つの踏絵が現われたことも忘れることができない。その踏絵には、かつてそれを踏んだ人々の足指の黒い痕までが残されていたのである。

「誰が踏みたくて踏絵に足をかけたろう。踏絵に足をおいた時その足はどんなに痛かったことか 遠藤周作」
今回の会場にも展示されている色紙に書きつけられた筆の文字は、そのまま、やがて書かれる『沈黙』の主題である。

遠藤周作はこうして自らの人生と文学の再出発を果たした。そしてそれが長崎という土地を舞台にした出来事

だったからこそ、今回の企画展のテーマは遠藤文学理解への何より重要な意味合いを持つてくる。

なお、今回の展示のなかに、長崎市内、長崎県内を対象にした二つの「文学散歩地図」があるが、三十か所におよぶ場所についての細かい解説が付されていて、遠藤文学と長崎とのつながりが一目瞭然となるのも興味深い。



鼎談する池坊氏(中央)と加藤(左)・高橋(右)両幹事

今回の第7回企画展初日の5月19日には、長崎市長代理として古賀友一郎・副市長も出席した新企画展オープニングセレモニーが文学館のエンターランスホールで行われ、引き続き文学館の多目的室では記念鼎談が開催された。ゲストの池坊保子氏(華道家・衆議院議員)に、周作クラブの高橋千劍破、加藤宗哉両幹事も加わり、和やかな雰囲気の中に「遠藤周作の思い出」が語られた。